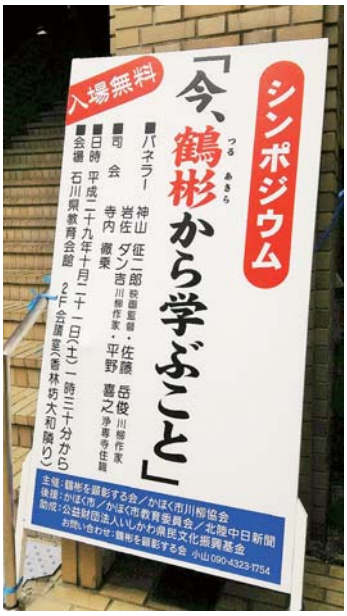
よみがえれ鶴彬

パネラー4氏 熱く語る

あの不幸な時代を繰り返さぬために



パネリスト

神山征二郎　氏
佐藤　岳俊　氏
岩佐ダン吉　氏
平野　喜之　氏

司会

寺内　徹乗　氏

鶴彬通信
はばたき
特別号
2018年１月21日
鶴彬を顕彰する会

シンポジュウム特集

鶴彬の功績を振り返るシンポジウム「今、鶴彬から学ぶこと」が昨年10月21日午後1時半～4時、金沢市香林坊の石川県教育会館で開かれ、市民約90人が参加し、平和への思いを新たにしました。

パネリストとして、映画「鶴彬 こころの軌跡」の神山征二郎監督と、各地で鶴彬句碑建立の立役者だった岩手県の川柳作家、「川柳人」主宰の佐藤岳俊さん、大阪府の「あかつき川柳会」会長、岩佐ダン吉さん、かほく市高松からは浄専寺の平野喜之住職が登場。寺内徹乗さんが司会されました。

遠田勝良さんの進行のもと北口吉治さんが開会の挨拶。途中休憩を挟み、東京の川柳人、市民活動家、乱鬼龍さんも登場。後半、パネラーの議論も深まったところで、板坂洋介さんが閉会の挨拶。

飛び入りで田村光彰さん、朴賢沢さんのお話もありました。

シンポジウム「今、鶴彬（つるあきら）から学ぶこと」

パネラー

日本映画界の巨匠
神山征二郎（こうやま） 監督
映画「鶴彬 こころの軌跡」を制作
［東京都］

1941年、岐阜県岐阜市に生まれる。1971年「鯉のいる村」で監督デビュー。「ハチ公物語」「ひめゆりの塔」「大河の一滴」「ラストゲーム（最後の早慶戦）」などメジャーヒット作品から、「郡上一揆」など市民参加のヒューマニズムあふれる作品を次々と発表し、今日の日本映画をささえる監督のひとりである。

川柳作家　柳誌「川柳人」主宰
佐藤岳俊（がくしゅん） さん
盛岡の鶴彬句碑建立に尽力
［岩手県］

1945年、岩手県奥州市胆沢区生まれ。白石朝太郎に師事。盛岡市光照寺にある鶴彬川柳碑「手と足をもいだ丸太にしてかへし」建立発起人。「鶴彬・井上剣花坊祭」実行委員長。「川柳人」編集発行人。日本川柳協会理事。岩手県川柳連盟理事長。著書に評論集「縄文の土偶」「現代川柳の原風景」「現代川柳の宇宙」。

川柳作家　あかつき川柳会会長
岩佐ダン吉 さん
（本名：興輝）
大阪城公園の鶴彬句碑建立に尽力
［大阪府］

1941年、広島県三次市生まれ。大阪府下で民主商工会事務局の活動30年。2001年「あかつき川柳会」を創立。2003年ダン吉川柳・句文集「熱い汗」発刊。2008年大阪城公園内に「鶴彬顕彰碑」を建立。現在、あかつき川柳会会長、岸和田川柳会会長。大阪府下で5ヶ所の川柳教室。全国商工新聞など12誌・紙で川柳選評執筆。

浄専寺住職　鶴彬を顕彰する会幹事
平野喜之 さん
［石川県］

1964年、京都生まれ。金沢大学大学院博士課程修了。大谷大学博士課程満期退学。理学博士。数学、仏教学も専門。2013年から浄専寺住職。金沢大学非常勤講師も務める。

司会　鶴彬を顕彰する会幹事
寺内徹乗（てつじょう） さん
［石川県］

1976年、石川県河北郡高松町（現・かほく市）に生まれ、同地で育つ。金沢泉丘高校在学時に禅と出会い、19歳で曹洞宗で得度。駒澤大学仏教学部を卒業後、石川県立看護大学卒業。現在は看護師として病院に勤務する傍ら、政治や社会などについて評論活動を行う。2017年、絵本「鶴彬の生涯」を制作。

シンポジュウム

「いま、鶴彬から学ぶこと」

参加者90人、熱心に耳傾ける

《総合司会：鶴彬を顕彰する会幹事・遠田勝良》明日は総選挙の投票日です。どういう結果になるかはわかりませんが、非常にきな臭い情勢がかもしだされています。こういう状況のなかで、鶴彬の句のなかで、心に残った句をあげれば、**「退けば　餓えるばかりなり　前へ出る」**というものがあります。

現在の私たちに置き換えると、抵抗もしないで、何もしないで、退いていけば、自由も民主主義も平和も奪い取られてしまうということを感じる川柳だと思います。このような現状のなかで、シンポジウムが開かれることは、鶴彬からわれわれの生き方を照らし出すために、非常に意義があると思います。それではまず、鶴彬を顕彰する会を代表して、当会副会長の北口吉治がご挨拶申し上げます。

遠田勝良さん

《鶴彬を顕彰する会副会長・北口吉治》今日のシンポジウムは、総選挙投票日を前日にして、戦前の鶴彬と今日の政治のあいだが問われているという感じがします。本来は長谷久人会長が挨拶を述べるところですが、都合により当会の副会長、北口吉治が代理としてご挨拶いたします。

わたしは治安維持法国家賠償要求同盟の県本部の会長もしながら、高松の皆さんと一緒に活動できることを非常に誇りに思っています。こういう活動は、ねばり強い活動が必要でありまして、それが、いま実ってきています。去る5月3日に安倍首相が憲法を改正するという旗を掲げました。わたしは70年前の中学1年生のときに、新しい憲法の話を1年間学習することができました。自分たちが作った憲法が平和憲法としていかに大切なものか、つくづく実感しました。

去る5月に国賠同盟の北信越の会議がありまして、そこで、新憲法をお祝いする歌が披露されました。当時、「憲法音頭」という歌が作られています。佐藤ハチローが作詞して、中山晋平が作曲しています。その一節を紹介しますと、全体で4題目まであり、2題目は「古いすげ笠／チョンホイナ／さらりとすてて／平和日本の／花の笠／とんできたきた／うぐいすひばり／鳴けば希望の／虹が出る／ソレ／チョンホイナ／ハ／チョンホイナ／うれしじゃないか」という歌詞です。

今日のシンポジウムに際して、鶴彬のことを考えると、鶴彬は獄死をしております。石川県内で獄死したのは10人で、治安維持法の犠牲者は約235人です。これまでの10年間で、図書館で調べた結果その数になりました。富山や福井から来て、石川県で活動した人たちの名前については、確実に調査しないと記入できないので、来年の35周年記念までに調査をして、パンフレットを作って、県内に普及したいと思っています。

神山征二郎監督によって鶴彬の映画ができて、日本中に広めることができました。これは川柳界にとって非常に画期的なことであったと、確信を持ちました。今日のシンポジウムでは、ひとりひとりが戦前における鶴彬の活動の偉大さに触れていただきたいと思います。簡単ですが、開会の挨拶とさせていただきます。

北口吉治さん

《総合司会：遠田勝良》ありがとうございました。これからの予定を申し上げます。まず、パネリストの紹介―討論―閉会という道筋になります。閉会のあとに、ひとつご案内があります。尹奉吉（ユン・ボンギル）に関するシンポジウムが12月の２日、３日に金沢であるそうで、その紹介を田村光彰さんがいたしますので、聞いていただきたいと思います。

それから、ロビーに鶴彬関係の資料や出版物が並べられておりますので、皆さんよろしくお願いします。

それでは、まず映画『鶴彬　こころの軌跡』のメガホンをとられました神山征二郎監督を紹介します。次は、岩手県から来られました川柳作家で『川柳人』を主宰しておられます佐藤岳俊さんです。次に大阪から来られました「あかつき川柳会」の会長岩佐ダン吉さんです。そして当会の幹事で、かほく市高松の浄専寺で住職をされている平野喜之さん。司会は当会の幹事である寺内徹乗さんにしていただきます。寺内さんは『絵本　鶴彬の生涯』を書きました。非常に好評で、ロビーに置いてありますので、ぜひ手に取って見てください。

では、シンポジウムの司会を寺内さんにお願いします。

《司会：鶴彬を顕彰する会幹事・寺内徹乗》それでは司会を務めさせていただきます。パート１「どういうところに鶴彬の価値を見出したか」という質問をしたいと思います。まずは佐藤岳俊さんにお願いします。鶴彬のお墓が盛岡にあります。そこで佐藤さんは長い間鶴彬の研究と顕彰活動をしてこられました。盛岡で、句碑ができるまでの経緯と句碑をどのように活用していくかということを交えて教えていただきたいと思います。

寺内徹乗さん

鶴彬の墓を抱いて一叩人泣く

《『川柳人』主宰・佐藤岳俊》岩手県から参りました佐藤岳俊です。一叩人さんが10年かけて、鶴彬の墓を発見しました。石川県ではなく、実は岩手県盛岡市光照寺の喜多家の墓に葬られていました。一叩人さんは10年捜して、その墓を見つけたとき、墓を抱いて泣きました。

佐藤岳俊さん

それは１９７６(昭和51)年10月のことでした。彼はその発見をわたしに電話で知らせてくれました。そして１９７７(昭和52)年９月14日、第１回の鶴彬墓前祭がおこなわれました。その時に写した写真のなかには、詩人の秋山清、一叩人、それから鶴彬の全集を出したたいまつ社の大野晋も入っております。

わたしは鶴彬の碑を建てたいと、仲間に相談しまして、計画に入りました。１９８２(昭和57)年春に７００通の趣意書を全国に出して、鶴彬の碑をぜひとも建てたいとお願いしました。わたしが一応発起人になりまして、出発したわけでございます。

これが鶴彬の句碑で、**「手と足を　もいだ丸太に　してかへし」**と

石川啄木の句碑

刻みました。彼の作品のなかでも最高レベルの作品だと思っています。鶴彬は達筆な人で―卯辰山（金沢）の自筆はちょっと読めませんね―それでは、句碑の意味がわからないので、誰でもわかるような字で作ることにしました。鶴彬が兄貴のように思っていた岩手県の石川啄木の碑（故郷渋民村にある）に**「やはらかに　柳あをめる　北上の岸　辺目に見ゆ　泣けとごとくに」**と刻まれている碑にあるような、わかりやすい文字で作りたいというのがわたしたちの考えでした。

全国に親書を出したところ、鶴彬全集を作った一叩人さん―本当にあの人がいなければ、鶴彬も光り輝かなかった―その人が、碑文に「反戦のマークを入れよう」と言ってきました。これにはわたしも驚きました。なんでこの碑に「反戦マーク」を入れるのか。碑そのものがすでに戦争を批判しているのにと思い、わたしは一叩人さんに「マークはいらない」と説得しました。

アメリカはベトナムにたいして、B52による北爆や枯れ葉剤作戦、ジェノサイド作戦を遂行し、バックアップは日本の役割でした。その時に戦争に反対するアメリカの兵隊が使ったカットが「反戦マーク」でした。実はわたしは知らなかったのですが、「そういうマークはいらない」と、断ったわけです。そして一叩人さんの要求を断ちきって、句碑建立に持ち込みました。

反戦マーク

山を切り拓いて句碑の地を提供

ところで皆さん、句碑というものは石があればいい、というものではありません。どこに建てるのか、場所ですね。盛岡市は小さい街ですが、最初は石川啄木の歌碑が建っている「不来方城（こずかたじょう）」で建てたいと話したんですが、「鶴彬は岩手県の人でない」と言われて拒否されました。ところが、捨てる神あれば拾う神あり、ひとりの人が現れました。自分の山を切り拓いて、松園観音墓地を作った人です。その人からこの場所に、鶴彬の碑を建ててもいいと、許可をもらいました。

この人は小田天牢（本名・小田哲男）さんで、北上川をきれいにする会の会長をやっていて、自分の土地に墓地を作って、この墓地を欲しい人にただでくれるといったわけです。ここに、鶴彬の碑を建ててもよいということで、許可を得ました。

松園観音

小田さんは、墓地の脇に観音像を建てまして、朝5時に起きて、散歩するわけですね。その時に転がっている木とか枝とかを拾ってきて、自分で1万体の仏像を作りました。それで、小田さんが鶴彬の句を理解して、松園観音という場所が決まりました。このようにして設置場所がきまりまして、私たちは前に進めました。

最後になりますが、通常石の上にべったりと碑を置くんですが、それじゃ芸がないということで、風通しを良くするために、枕石をふたつ並べてその上に碑を上げました。鶴彬に会いに行くときは、そこで鶴彬が呼吸をしていると感じて見ていただければいいかなと思っています。

鶴彬句碑

2012年、松園観音墓地から鶴彬の墓がある光照寺に移築された。

その碑の石は、啄木が生まれた渋民村近くにある姫神山の麓から出る石を使いました。鶴彬は若いときから石川啄木を兄のように感じていましたので、できる

だけそれに添いたいということで、姫神山の石にしたわけです。わたしたちも死んでからどこへ行くかは自分の意志で決められません。石川県で生まれた鶴彬が盛岡市に眠っています。岩手県に生まれた石川啄木が函館に眠っています。これもまた奇異な感じがしますが、そういう人間の道があるかなと思います。

最少の学歴で本当のインテリに

最後にもうひとつ、鶴彬がいちばんすごいなと思っている点は、最低の学歴で、本当のインテリゲンチャになった人ということです。ものすごい努力をしていた人だと、常に考えています。

盛岡に、多くの人がやって来ます。今年は10月５日に仙台から31人―川柳にあまり関係のない芸術文化協会―が来ました。その時にパンフレットを使って、鶴彬の墓がなぜ盛岡にあるのかについて説明しました。

《司会：寺内徹乗》次に、大阪を中心に時事川柳を活発になされている、あかつき川柳会の岩佐ダン吉さん、よろしくお願いします。

鶴彬顕彰碑に５年がかりの交渉

《あかつき川柳会会長・岩佐ダン吉》岩佐ダン吉といいます。生まれは広島県三次市です。大阪城公園にある鶴彬の句碑をわたしどもは、顕彰碑といっております。川柳を紹介する場ではなくて、鶴彬を顕彰したい、あの時代に命をかけて、戦争反対を叫んだ彼の人生や川柳を顕彰したいということなので、これから句碑と呼ばずに顕彰碑と呼びます。

われわれは２００１年に大阪で、「あかつき川柳会」をつくりました。大阪は全国一の川柳の激戦地でして、59社くらいがひしめき合っています。われわれはあちこちの川柳社に入っていたんですが、「あかつき川柳会」を立ち上げようではないかと、「鶴彬をはじめ、先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かし、川柳の普及と向上に努めることを目的とします」という会則を掲げて、スタートしました。

岩佐ダン吉さん

その当時、あかつき川柳会には十数人いましたが、鶴彬について詳しく知っているものは誰もおりませんでした。仲間のなかに、鶴彬が『戦旗』などに発表した川柳をもっていた人がいました。

鶴彬は大阪に非常に縁がある人です。大阪に働きに来て、志ならずも石川に帰り、次に来たときには、大阪衛戍監獄に収監をされるという２度も縁がある反戦川柳人として、ぜひ彼を顕彰したい、しようではないかという声が起きてきました。われわれはまず最初に、大阪市に頼りました。大阪市には大阪城公園という広大な場所があります。大阪市に申し入れをしたのですが（２００３年）、断られました。大阪市は三好達治（中之島公園）とか、宇野浩二（中大江公園）とか、織田作之助（天王寺区・口縄坂）とか、有名な小説家、文芸家の歌碑や句碑を建てていました。虫のいい話ですが、そのなかに鶴彬もぜひ入れてもらえないかと話に行きましたが、「もうその行事は終わっており、しかもかなりの年月を経過していて、大阪市にはそういう予算は一切ありません。残念ですけどお引き取りください」という対応から始まりました。

最初はそういう状況で、かなり落胆し、難儀やなーという話でしたが、何回か大阪市と会ううちに、担当者から「川柳とはいったいどういうものなんですか」「鶴彬というのは川柳界でそんなに評価の高い人なのか」などと、聞いてくるようになりました。そのうちに担当者

が変わり、ある女性幹部から「大阪市の図書館に鶴彬に関するこんな資料がありました」「こんなことが出てきました」と、資料を持ってきてくれるようになりました。

5年間で30回ほど、大阪市との交渉をやりました。その後、大阪市の大阪城公園のなかの用地を貸与するから、そこに作ってもいいということになりました。ただし、大阪城公園は国有地であり、特別史跡に指定されているので、顕彰碑とか歌碑、句碑というのは困るということでした。

寄贈のサルスベリに添えて建立

最終的には大阪市の方から、大阪城は緑化事業をやっている、もし緑化事業に協力してもらえるなら、考慮する余地があるということになり、わたしどもはサルスベリの木を寄贈したいと提案をしました。大阪城には春の梅とか桜、桃の植樹はあるが、夏から秋にかけての植樹がなく、サルスベリをもらえるのならば歓迎したいということになりました。サルスベリの花言葉は雄弁ということですね。「一番いいや」ということで、サルスベリを寄贈さしてもらいました。

大阪城公園にある鶴彬顕彰碑

サルスベリとセットにして、顕彰碑を置いてもいいということになりました。しかしみなさん、サルスベリの白、ピンク、紫の花の下の石が非常に大きいでしょ。これを建立するときに、大阪市は立ち会いに来ておりましたが、石があまりにも大きい―身長が130センチ、ウエストが620センチ、体重が7トン―ので、しかし大阪市も今さらどうこういえなくて、「できるだけ地中深く入れて欲しい」と言われたので、20センチくらい埋めました。

鶴彬の顕彰碑を建立した地にたくさんの人が訪ねてくれています。今年だけでも6回ぐらいは顕彰碑の見学にやってきてくれました。不思議なことに、顕彰碑の前で川柳を詠んでもらうと非常に立派な川柳が詠めます。わたしは5つの川柳教室をやっているのですが、鶴彬が詠んだような、戦争反対の句を詠んでもらおうと思っても、なかなか皆さんその気にならないんです。

こないだは、顕彰碑についての細かい説明はやめて、皆さん見てください、この裏を見てください。この一帯が大阪の衛戍監獄の跡でした。ここに22歳(から24歳)の鶴彬が1年8カ月収監されていました。顕彰碑の「暁を抱いて闇に　ある蕾」や、その暗獄のなかで詠んだ「鉄骨の伸びる打鋲に遠ひびき」などの川柳を紹介し、一歩ぐらいさがってもらって、それから皆さんに川柳を詠んでもらいました。そのあと昼食会をやったのですが、全部入選にしたいと思いました。

これから鶴彬の顕彰碑を中心にしていろんな行事を考えているんですが、ともかく現代を風刺する川柳を作る場にしたいと、つくづく思います。しかしまだまだ川柳人のなかには、現代を風刺することに躊躇する人がたくさんいて、たとえば、(さいたま市大宮区の三橋公民館が発行する公民館だよりで掲載を拒否された)**「梅雨空に　九条守れの　女性デモ」**について、裁判所が「不掲載は不当」という判決を出しました。われわれのなかでも、こういう川柳を発表することに、それなりに勇気がいるんじゃないかなと思います。

記者会見する俳句作者の女性
(東京新聞より転載)

今の時代、世論になる川柳を

あかつき川柳会に来てもらって、みんなのびのびとしています。とくに選者について思うのですが、選者が他所で詠んでいる川柳を見ていると、「この人難儀やなー」という感じがするのですが、あかつき川柳会に来てくれると、のびのびと入選にとってくれるんです。だから、来てくれる仲間も気分よく、選者ものびのびとやってくれて、あかつき川柳会を作ってよかったなーと感じています。現在、二百数十名の会員がいるのですが、もっともっと仲間を増やして、川柳界のなかでも影響力を強めていって、石川や岩手の仲間、新たに挑戦される東京の顕彰会の仲間と一緒に、今の時代に一番大事な川柳を詠んで、世論になるようにしていきたいと考えています。

《司会：寺内徹乗》ありがとうございました。次は平野喜之さんにお訊ねします。石川県には鶴彬の句碑が全部で４つあります。卯辰山公園の碑が一番古いもので、あと高松にいくつかありますが、その経緯についてお話ください。

《鶴彬を顕彰する会幹事・平野喜之》かほく市高松で住職をしている平野喜之と申します。鶴彬を顕彰する会に主体的にかかわりはじめたのは、２年ぐらい前からだと思います。

平野喜之さん

今回の報告も、寺内さんに教えてもらったことが多いと思います。碑のことや歴史のことを考えながらお話させていただきますが、一番大事なことは鶴彬の生き方です。鶴彬は国策の犠牲者たちの血を吐くような苦しみとか、悲しみとかをありのままに、恐れず詠みました。国策とは資本主義とか軍隊のことです。そして現代も国策の危惧に晒されつつあり、鶴彬の生き方を広めていくことによって、わたしたちが国策の犠牲にならないようにするという意味があると思います。

それから金沢大学の名誉教授で、もう亡くなられましたが、深井一郎先生（『反戦川柳作家 鶴彬』の著者）という人がいます。深井先生は、鶴彬没後70年（２００８年）の５月と６月に新聞で２つのことを書きました。

ひとつは「鶴は頭で考えるのではなく腹で考える。川柳は心が叫ぶ詩であり、大衆がたたかう武器だと思う。憲法九条改変により、『武力行使』が現実味を帯びる今、鶴が放つ言葉は私たちの肺腑を突く」と。現在は２００８年よりももっと深刻な状況になってきていると思います。

もうひとつは「人がおっかながって扱わない材料を恐怖心を持たないが如く扱っていく。社会的に深刻であればあるほど、やめるわけにはいかなかったのです。自分の目で確かめ、生活の中で言わざるを得ないものだけ扱っている」と深井先生が言っています。わたしにとって、鶴彬の生きざまこそが学ばねばならないところだと思います。

金沢卯辰山にある鶴彬句碑

61年前に鶴彬顕彰活動スタート

それでは寺内さんの質問に答えていきたいと思います。まず鶴彬が亡くなってから今年で没後79年です。今から61年前に鶴彬の顕彰活動が石川県で始まりました。長崎県生まれでずっと金沢で活動していた岡田一杜さんが61年前の１９５６年に、金沢のお寺で第

１回鶴彬忌句会を開きました。その後に、鶴彬の地元高松町で川柳大会が開かれるようになりました。

鶴彬が亡くなったのは79年前で、地元石川県で顕彰活動が始まったのは61年前ですが、その後約30年間は目立ったような活動がありませんでした。鶴彬の川柳のなかに**「地下に潜って　春へ春への　導火線」**という句がありますが、ぼくは61年前（１９５６年）からの30年間は、顕彰活動が羽ばたくまでの導火線状態だと考えています。その後、導火線が小爆発、中爆発、大爆発と、３回爆発しています。

まず導火線状態の時期に鶴彬の句碑が卯辰山公園に出来ました。**「暁を抱いて闇に　ゐる蕾」**と刻まれていますが、岡田一杜さん、山田文子さん（鶴彬の妹）の２人が呼びかけ人になってできました。１９６５年（今から52年前）のことです。卯辰山に句碑が出来てから７年後の１９７２年（45年前）に、**「枯れ芝よ　団結をして　春を待つ」**の句碑が高松児童公園にできました。これは山田文子さんが当時国会議員だった小川半次さん（高松町出身・鶴彬の同級生）に呼びかけ、小川さんが卯辰山の句碑を訪ねて、「どうして高松にも建てないのか」という話になり、45年前に高松児童公園に出来ました。

その句碑がどのように活用されたかというと、鶴彬の友人であった丹羽又平さん（元高松町長・歯科医）と顕彰会に係わってこられた細川律子さんの２人が高松の歴史探索のボランティアガイドをしていたときに、鶴彬の句碑をそのコースに入れたそうです。ここまでは鶴彬が羽ばたくまでの導火線状態だと考えております。

鶴彬句碑（高松の児童公園）

いちばん最初の小爆発ですが、導火線にようやく火が付いて、最初の爆発が今から約30年前に来ました。口火を切ったのは作家の田辺聖子さんで、『川柳でんでん太鼓』（講談社、１９８５年）という小説で、鶴彬が紹介されました。31年前（１９８６年）に岡田一杜さんが始めた鶴彬句会の主催が高松川柳会に移り、その翌年１９８７年（30年前）に高松川柳会主催で、第１回鶴彬忌川柳大会が開かれました。現在でも続いていて、石川県、富山県を中心にたくさんの川柳人が集まっています。

それから、21年前（１９９６年）に、第１回鶴彬川柳大賞が始まり、全国から応募されるようになり、昨年からは主催に鶴彬を顕彰する会が加わりました。今年で22年目になります。

それから中爆発が起こります。最初の句碑**「枯れ芝よ　団結をして　春を待つ」**が建てられた高松児童公園は、日の当たらない公園でしたが、それが新設された高松歴史公園に移りました。当時の高松町会議員で当会の会長である長谷久人さんにご尽力いただいて、移設することになりました。

同じ時期、何が起きたかと申しますと、澤地久枝さんが度々高松に

鶴彬生家に立つ鶴彬句碑（神山征二郎筆）

浄専寺に立つ鶴彬句碑（神山征二郎筆）

足を運びまして、一叩人がまとめた鶴彬全集の復刻版を発行しました。１９９８年のことです。これが中爆発です。

神山監督の鶴彬映画で〝大爆発〟

鶴彬を顕彰する友の会が発足しますと、翌年（１９９９年）に「第１回碑前祭　鶴彬をたたえる集い」がおこなわれました。これに当時の商工会などが協力してくださって、現在、顕彰会として引き継がれています。

いよいよ大爆発に至るのですが、２００９年は鶴彬生誕１００年で、今から８年前です。３月に神山征二郎監督の『鶴彬　こころの軌跡』が上映されました。また神山監督に鶴彬が最後に詠んだ**「胎内の　動き知るころ　骨がつき」**と**「可憐なる　母は私を　産みました」**を直筆で書いていただいて、２００９年３月に句碑となりました。**「胎内の　動き知るころ　骨がつき」**の句碑は浄専寺の境内にあり、

神山征二郎監督の映画「鶴彬　こころの軌跡」
㊧から高橋長英、安藤一夫、樫山文枝、池上リョヲマ

「可憐なる　母は私を　産みました」の句碑は鶴彬の生家といわれている喜多義教さん（鶴彬の甥）の家の前庭にあります。

その翌年２０１０年７月に、顕彰会の中心を担ってきた角島広治さんが編集責任者として、機関誌『はばたき』を創刊しました。すでに29号が出され、来週にも30号が発行される予定です。

今から５年前ですが、第１回高松歴史街道フェスタが始まりました。そこで万燈会をはじめました。皆さんに行燈を飾ってもらい、鶴彬の川柳に触れていただきたいとの思いでやりました。アトラクションとか、さまざまな地域のイベントを盛り込んでいます。

３年続けて戦争と平和の特別授業

第２回目のフェスタから市民川柳祭もはじめました。これは小学生、中学生に平和と戦争の問題について詠んでもらいます。そして盛岡で小学校の校長先生をしていた宇部功さんに来ていただきました。高松地区内の小学校で２０１５年、２０１６年そして今年と３年連続して、鶴彬の句から平和と戦争を考えるという授業をしてもらいました。高松の小学生に地元に反戦川柳作家がいたことを知ってもらうための機会になりました。

去年は、鶴彬を顕彰する会が主催して、第１回川柳講座をおこないました。今年はここで司会している寺内徹乗さんが『絵本　鶴彬の生涯』を作りました。子どもたちがあらかじめ絵本で勉強しておいて、宇部先生の授業を聞くことにしています。このような高松の子どもたちに鶴彬を知ってもらおうという活動をとおして、これから羽ばたいていきたいなぁと思っています。

《司会：寺内徹乗》本日、前田大峰さんが来られています。岡田一杜さんと一緒に卯辰山の句碑を建立するのに尽力された方です。その卯辰山公園の句碑が52年前に出来ましたが、それが鶴彬を顕彰する活

動の礎（いしずえ）になったと思うんです。また、高松の句碑では鶴彬と同じ小学校で学んだ小川半次さんが同級生に声をかけてくれ、句碑の移設の際には長谷久人さんが尽力して下さいました。

映画『鶴彬　こころの軌跡』によって鶴彬の認知度が飛躍的に広がるわけですが、監督の神山征二郎さんから、映画制作の経緯や苦労などをお話いただきましょう。

予算二千万円、どうやって作るの

《映画監督・神山征二郎》わたしの師匠は新藤兼人さんで、１００歳の高齢で亡くなりましたが、大変厳しい先生でした。とくに映画の作り方を教えられたわけではなく、傍で見ていただけなんですが、ひとつだけ、「来た仕事は断るな」「そんなに来るもんじゃないから、はいわかりましたと言っていりゃいいんだ」と教わりました。

９年前ですかね、知り合いのプロデューサー（平野寛さん・岐阜教育映画センター代表取締役）から、鶴彬の話が来たのですが、予算が２０００万円でした。「ドキュメンタリーでもいい」と言われたのですが、ドキュメンタリーでも２０００万円で出来るかどうかわかりません。わたしは2億とか、3億の仕事しかしていないから、２０００万円でどうやって映画作るのかと困惑しました。

そのころ、『ラストゲーム―最後の早慶戦』（２００８年８月公開）というメジャーな仕事の話があって、資金をめぐってもめてましたが、それはやりたい映画でした。戦争末期のことで、当時は６大学野球のほうがプロ野球より人気がありましたが、ベースボールはアメリカのスポーツだから、軍に「戦争のさなかにベースボールなどやってるな、バカ野郎」と言われ、できなくなりました。

神山征二郎さん

当時は、学生さんは学校行っていると徴兵されなくて済みました。それで、無理して大学へ行っている人がいるくらいでした。進んで兵隊に行きたい人は１００人のうち１人くらいでね。それで神宮外苑の学徒出陣で、戦場にみんな送り出されていって、特攻とか、中国とか、あるいは南方へ行き、次々と死んでいくわけです。

その映画はやりたいと思いました。予算もあって、亡くなった藤田まことさん、富司純子さん、石坂浩二さんとか、バリバリのいい俳優さんが使えるというので、これはいいチャンスだと思っていました。監督にとっては、いい俳優さんと仕事が出来るということはうれしいことなんです。それで、鶴彬の話については、とりあえず資料を送ってくれと、ほとんどやる気はありませんでした。

それで『ラストゲーム』が終わりまして、プロデューサーから「高松までいっぺん行ってくれないか」と言われ、仕事が一段落していましたから、じゃぁ行きましょうかとなり、歓迎会をしてもらいました。長谷久人会長もいましたが、地元を中心に、全国的な募金をしていたのですが、しかし１０００万とか２０００万とかではと、何とも言えない空気が歓迎会に漂っていました。

いろいろと思い悩んでいるうちに、しかしやることになりました。ただし、私はドキュメンタリーではなく、ドラマの専門家なので、ドラマでないと鶴彬を描くのは難しい。ドキュメンタリーを撮る人もいますが、それは写真とかインタビューで構成すれば、それは映画になりますが、記録映画で人を集めるのはなかなか難しいものです。やっぱり俳優さんが鶴彬を演じて―樫山文枝さんは有名な俳優さんですから―、それじゃ見に行こうかという気になるもんですよ。

それで、「ドラマでやりたいから、せめて、倍くらいお金を集めてくれないか」と、気楽に言ってたら、深井一郎先生が中心になって、本当に集めてくださいました。ぼくもいいかげんに言っていたわけで

はなくて、『ラストゲーム―最後の早慶戦』の場合は、スタッフが70人ぐらいいて―髪やったり、メイキャップしたり―、鶴彬の予算だと10人ぐらいしかスタッフを組めないだろうと思っていました。脚本はわたしの連れあいで、加藤伸代（脚本家、昨年４月死去）に頼みました。連れあいでもあり、映画の同志ですから、万が一うまくいかなくても、払わなくてもすみますから。それだけではなく現代史をよく勉強している人でした。

こんな厳しい映画作り経験ない

普段の移動では、スタッフは普通席ですが、わたしは監督ですからグリーン席なんです。だけど予算がなくて、普通乗用車にいろんな荷物を積んで、助監督とスタッフと４人ぐらいが一緒に乗って、８時間ぐらいかけて高松へ来ました。これを２回もやりました。それくらい台所事情が厳しかったのです。

もうひとつだけ条件つけました。ロケ中は録音していますから、車が走ったりすると困るので、「人止め」などの仕事を地元にお願いしました。それはとても10人のスタッフでは出来ないので、「毎日最低５人、手伝ってもらいたい。朝６時にきて終わるまで、途中で抜けることは出来ません」と。やってくださる方がでまして、わたしはこれまでに30本ほど映画を作っていますが、これほど厳しい仕事をしたことがありません。

私の息子が助監督をやっていて、制作費の勘定をしたのですが、スタッフのお弁当代１日２４５円なんですよ。どうはじいてもそれだけしか出ないんです。長谷さんも、「さすがに２４５円では」と、うなったくらいです。地元のご婦人にお手伝いして頂き、寝泊まりする所もただで貸して頂きました。樫山さんなど主だった俳優だけはホテルに泊めなければいけないので、河北亭に泊まってもらいました。わたしの寝るところは、浄専寺の先代住職（平野道雄さん）と親しくなっていたので、お寺の部屋―隣はお墓なんですけど―を貸していただいて、朝は奥様に朝ごはんを作っていただきました。

戦争は最大の、底なしの利権

鶴彬は戦争をやる人は資本家の手先だと、（当時）いちばん言ってはいけないことを言ったわけです。戦争は最大の利権ですよ。ダムや道路を作るとき、利権と言いますが、森友、加計学園も利権屋以外の何ものでもないですよ。教育のことなど何も考えていません。今どき５歳か６歳の子どもに、教育勅語をやらせているなんて問題ですよ。

戦争とは底なしの利権なんです。弾１万発撃ったと言っても、軍事機密ですから、撃ってなくてもわかりません。全部税金です。戦争終わる頃には（予算の軍事費が）80％ぐらいになっていたんじゃないですか。（註：太平洋戦争の末期１９４４年には、予算中の軍事費割合が８５・５％になっていた。大蔵省昭和財政史編集室編『昭和財政史４巻』より）。いまの防衛費も気がついたら20％ぐらいになっちゃうんじゃないですか（註：２０１７年度で予算の防衛費割合が約５・２％）。鶴彬はそういうことを鋭く見抜いた人でした。

鶴彬のお父さんもシベリア出兵ですか、戦争に行き、若いころ病気で亡くなっています。それでお母さんが、東京の親戚の後妻になりました。鶴彬は寂しかっただろうと思います。それが鶴彬の人格形成を左右したと思います。映画は人間を造形していく仕事ですから、お母さんに会いたかっただろうと、脚本を作りました。まだ見ていない方は、２０００円ですが、会の経費になりますので、ＤＶＤをぜひお買い求めください。

わたしは、『ラストゲーム』とか、『ハチ公物語』（１９８７年公開）など30本くらいの映画を作っていますが、必要があって、戦争の時代もしくは戦争そのものを描いた映画を何本撮ったかをチェックしましたら、15本でした。わたしは１９７１年30歳の時に監督になり、46年

間映画監督をやっています。監督になった年は、戦争が終わって25年目です。まだ日本の国内に父を失った人、夫を失った人、ケガをした人がたくさんいました。「戦争をやるな」というのはあたりまえの時代で、だから戦争映画を撮ることが出来ました。

右翼の本平積み、嫌な時代に

特攻隊員と村の少年の友情を描いた映画『月光の夏』（１９９３年）を撮りました。仙台市の近くですが、この間の大震災のあったところに、航空自衛隊松島基地があり、戦争中は海軍の基地でした。飛行機を写したかったもので、「すみません、自衛隊のなかで撮影させてくれませんか」と頼んだところ、「ちょっと考えさせてください」という返事でした。いまだったら門前払いでしょうが、そのころはまだ相談出来るくらいでした。結局は断られ、外から撮りましたが、その頃はまだそんな時代でした。

終戦50年が来まして、その２～３年の間に『ひめゆりの塔』など、戦争がらみの映画を３本か４本撮っています。この頃になると、本屋さんに「あの戦争は悪くなかった」「別に日本だけが悪いわけじゃない」という本がどんどん出るようになりました。右翼本がベストセラーになり、本屋に平積みされるようになりました。そのころから、戦争にまつわる仕事が出来なくなるかもしれないと思いました。

安倍政治が問題になっていますが、戦争などという仕掛けは総理大臣ひとりでどうこうなるようなものじゃありません。『鶴彬 こころの軌跡』の制作は８年前で、いやな時代になったなと思いつつ、作った戦争映画です。

《司会：寺内徹乗》では10分間休憩を挟みます。そしてパート２として、いま話されたことを総合的に考えて、討論をすすめたいと思います。

東京にも鶴彬句碑！協力お願い

《東京の川柳人、市民運動家・乱鬼龍氏》東京から参りました乱鬼龍です。皆さんご承知のように、鶴彬の生地石川県、お墓のある岩手県、そして大阪にも句碑が建っていますが、最後に死んでいった東京新宿になんとしてでも句碑を建てたいという運動をすすめています。いまの右傾化する情勢のなかで、相手のある話ですし、なかなか簡単ではありません。

私はこの運動は句碑をつくるだけの運動ではなくて、いまの右傾化にたいして、反戦平和を訴えていく運動だと思っています。入口に東京鶴彬顕彰会の募金要請のチラシがありますので、ぜひお持ち帰りいただいて、お力添えいただけたらと思います。ぜひ多くの皆さんとともに、鶴彬終焉の地東京に句碑を実現したいので、よろしくお願いします。

乱鬼龍さん

《司会：寺内徹乗》ありがとうございました。それでは、パート２と致しまして、今の時代に、鶴彬になりかわってわれわれに何ができるかということです。先ほどと同じ順番で語っていただきたいと思います。井上剣花坊さんがつくった『川柳人』という柳誌―鶴彬が編集していた時期もあるのですが―の伝統を受け継いでいる佐藤岳俊さんに、この右傾化する時代に川柳人としてどういう風に生きていけばいいのかについて話していただきたいと思います。

「川柳は怒りと笑いの熱い火花」

《佐藤岳俊》わたしは鶴彬が評論を発表していた『川柳人』を引き継いでやっています。いろんな弾圧を受けて、一時中断され、途切れ

途切れですが、今日までに９３５号も続けております。鶴彬は森田一二によって、井上剣花坊に紹介され、その後剣花坊が亡くなって、その奥さんの井上信子が引き継いだわけです。井上信子の『川柳人』が弾圧されて、中断されました。

その頃、井上信子は『川柳人』だけじゃなく、『蒼空』という雑誌も出していたんですね。昭和10（１９３５）年ころから日本が軍国主義になり、鶴彬は非国民にされるわけです。鶴彬は井上信子を援けて『蒼空』という冊子を創刊から13号までつくりましたが、その『蒼空』も特高から弾圧を受けました。

井上剣花坊は、全国を歩いて川柳を普及しました。亡くなる前のことです。『北斗』という雑誌が仙台にあったんですが、その『北斗』に仙台の浜夢助という人がいて、『蒼空』にも属していたのです。鶴彬はその関係上、『北斗』にすぐれた評論を送ったのですが、３回目の原稿を送ったときに、『北斗』から掲載を拒否されました。戦争のさなかという時代的背景がそうさせたのだと思います。

鶴彬は井上信子と一緒に、『蒼空』を発行していましたが、昭和12（１９３７）年ですが、東京深川にあった「木材通信社」という業界紙に働いていたとき、特高に連れて行かれました。その時代は、治安維持法を背景に、国家権力によって表現の自由が奪われた時代であり、それは現代の共謀罪法と同じような状況にあって、非常に危惧を感じております。

『川柳人』のなかで、鶴彬は常に論争して、評論を書き、作品も書いています。わたしは鶴彬になりかわるなど、絶対に有り得ないんですけど、ただ、その姿勢と方向とポリシーというものは受け継いでいかなければならないと考えております。

いま、『川柳人』11月号を編集しているのですが、鶴彬の一節を紹介しますと、「今日民衆のむいているものは、実は川柳のごとき街頭の芸術であり、批判の芸術である」「川柳というものは生きた現実を、生きた矛盾の姿であらわすのだ」といっています。そしてまた、「川柳はすでに通俗的ユーモアの風刺短詩ではなく、厳粛な現実批判の短詩である」ともいっています。

そして、ちょっと長いのですが、「われわれが現実を深く極めようとするならば、その本質としての矛盾にまでぶつからねばならないであろう。川柳とはかかる場合における文学に外ならない。それははげしい矛盾にぶつかればぶつかるほど、怒りと笑いの熱い火花を散らすものである。畢竟、川柳は右手に風刺の剣を、左手に憤りと笑いの情熱をそなえた現実の詩であると言われるのだ」（『川柳ねこやなぎ』一九三六年九月号）と言っているわけです。

だから、彼の評論のなかには、自分が生きることを、川柳の五七五に圧縮するということだと書いています。これは非常に難しいことです。要は頭で考えないで、胃袋で直感したと鶴彬は言っておりますが、わたしたちも現実から、常に学びとってですね、厳粛なる現実批判の風刺短詩の方向で、川柳を作っていくということなんです。

鶴彬から学ばねばならないことはたくさんありますが、私たちが生きている現実のなかで、川柳を作るということが大事だと思っています。鶴彬は反戦川柳人といわれますけども、自分でそういった

ことは一度もありません。彼は、本当に情熱をもった詩人だったわけです。詩を書いている人を詩人と申す人が多いですが、そうではなく、詩人なら詩を書くのは当たり前ですが、死ぬまで自分のポリシーをもって生きていくこと、それが詩人なんです。鶴彬はそういう面ですごい詩人であるとわたしは認識しています。

「共謀罪また起ち上がる鶴彬」

現代は大きな矛盾が山ほど出てきていますが、それを川柳に託して刻んでいくことが大事かなと思うわけです。岩手県から列車に乗って、東京から新幹線に乗ってまいりました。自分では１日に10句から20句の川柳をつくるんですが、そこで一句「共謀罪　また起ち上がる鶴彬」と詠みました。

鶴彬なら、まさにいま起ち上がってくると、そういう感じをわたしは思っています。鶴彬を顕彰しながら一歩前へ進むこと、ポリシーある現実批判の詩を作ることが大事かなと思っています。

映画監督の神山さんがいますが、作品のなかで鶴彬を多方面に、多角的に捉えています。人間の深さ、人間の広さ、人間の弱さを鶴彬のなかに見て映画をつくりましたが、わたしは川柳を詠むことによって鶴彬をめざすことかなと思っています。

商業的なもので、サラリーマン川柳は１回大口を開けて笑って終わり。そういうくだらないものがありますが、あれは川柳ではありません。川柳とは、鶴彬が言ったように、人間の本質を捉え、現実の矛盾を作品に刻んでいくものだと思っています。

わたしは終戦の昭和20（１９４５）年生まれです。８月15日に、天皇が「参った」といって、白い手ぬぐいを投げました。敗戦から生まれたのが、９条を含めた現在の憲法です。それを、ぶちこわそうとする内閣があるわけですよ。それは何を意味するか、神山さんが言われましたが、弾を売るやつが一番儲ける。弾を売って戦争したい人がいっぱいいます。アメリカがそうです。核の傘という幻の傘を欲しがっている者がいます。ミサイルが飛んできて、落ちてから逃げなさいといわれても、逃げるところもありません。外交、平和的な解決のために対話をしていくことが一番大事だと思います。

鶴彬は非常に明るい人間なんですよ。鶴彬は現実の矛盾を笑いにします。本当の笑いには真実があります。そういう笑いを川柳でつくろうと、わたしは鶴彬にずっと遅れてますが、毎日川柳を詠んでいます。

鶴彬は松本清張、太宰治と同じ年の生まれなんですね。皆さんは清張も太宰治も覚えているでしょうが、しかし鶴彬は知らない人が多い。清張も太宰治も自分が残すべきものを全部残しています。清張は40何歳にして小説家になって、『昭和史発掘』や『日本の黒い霧』など約１０００の小説を書いています。しかし鶴彬は29歳で亡くならなければ、１０００や２０００は書いたのではないでしょうか。わたしもできることなら、鶴彬のような広い気持ちをもって、川柳を作っていきたいと思っています。

《司会：寺内徹乗》岩佐ダン吉さんは、佐藤さんと同じ立場で、現実の矛盾を風刺する川柳を掲げて、あかつき川柳会を主宰しておられます。

運動紹介しマスコミ育てよう

《岩佐ダン吉》僕は川柳を詠んでるとき一番気になるのは、仲間が「最近のマスコミはなっていない」とよく言っていることです。しかし、今年の９月14日に第10回鶴彬顕彰忌で３つの行事、碑前祭、講演会、懇親会をおこない、それを９月21日に朝日新聞が特別の記事で、28日には毎日新聞も大きく報道してくれました。

それぞれの記者は事前に取材に来てくれ、いい内容で書いてくれて、うれしい気持ちを持ちました。新聞記者はよく勉強しておりまし

た。電話でも「してかへし」の「かへし」は「え」なのか「へ」なのかなどとしつこく聞かれるなど、しまいには、「朝日の責任で書いて下さい」と言いました。

「最近のマスコミは」というのはいいんですけど、マスコミを育てるために資料を与え、運動を紹介し、たくさんの仲間が集まることを知ってもらうことが大事やないかなと思います。川柳に限りませんが、応募もせず投稿もしないで、マスコミ任せで、出てきたことだけを批判するのは、寂しいと思います。

もうひとつ許せないことは、これまでは朝日新聞の声の欄には「大阪府岸和田市岩佐ダン吉」という署名で投稿が載っていたのですが、いまでは「大阪府岩佐ダン吉」とされています。「岸和田市」という部分がなくなり、「何何県誰誰」「何何府誰誰」ということになりました。読売新聞も毎日新聞も、「岸和田市誰誰」と「市」まで書いておりますね。それについて、朝日新聞に言い訳の記事が載りましたが、朝日新聞の声欄に住所―番地まで書いてないが―が書かれることで、投稿者が猛烈なバッシングを受けるのです。特に天皇の問題について投稿すると、猛烈な批判に晒されるそうですね。意見にたいする批判だけではなくて、「あなたのお孫さんは何々幼稚園に通っている」などと、家族の情報まで探し出して、攻撃してきます。ついに天下の朝日新聞が脅しに屈したのか、投稿者の住所を「大阪府」しか出さなくなりました。

安倍さんの応援団なのかどうかわかりませんが、非常に機敏に反応して、報復して来るという時代にわれわれがいるということは知っておくべきだと思います。それだけに、どっちの声が主流になるのか、われわれに問われているのではないかと思います。

大阪に「川柳瓦版」という会があるんですが、これは読売新聞がやっている会なんですが、その会合に行くと、時事吟ばっかりの川柳会なんです。時事吟以外なし。兼題もあるんですが―例えば「おみやげ」―、その場合に時事吟に詠むという専門の柳社（川柳の団体）なんですが、その句会に参加すると、いま、この柳社がどんな方向に行っているのかよくわかります。10年ほど前ですか、橋下徹さん―当時の市長ですね―を「万歳万歳。橋下万歳。よくやってくれる。既成政党の何とかをなくしてくれて、立派なもんだ」などという川柳を詠んでいました。その川柳を見ていると、その方（維新の会）が主流になるのではないかというぐらいの勢いがありました。

㊨から佐藤岳俊さん、神山征二郎さん、岩佐ダン吉さん、平野喜之さん、寺内徹乗さん

私共の会（あかつき川柳会）では、ちゃんとした川柳を詠もうじゃないかと呼びかけてきました。今は向こう（川柳瓦版）には、50人ほどの参加者がいるのですが、そのうち2割ぐらいが私共の仲間です。私らの句が必ずしも入選するとは限らないのですが、「こういう見方もあるんじゃないか」などと、発信を始めて、だいぶ雰囲気が変わりました。まず選者が変わります。投稿する人が変われば、雰囲気も変わります。私はそれが世論の攻勢になるのではないかと思っています。

先ほど岳俊さんが反戦川柳人鶴彬について触れていました。今回のシンポジウムのチラシにもありますように、以前から「反戦川柳人は冷たい言い方だ」と言う人もおりますが、わたしはそうは思いません。「反戦川柳人」は立派な価値だと思います。国の最大の悪事は戦争することで、それに立ち向かっていく非常に立派な反戦川柳人で

あり、いいんじゃないかなと思っています。わたしは必ず反戦川柳人鶴彬と呼んでいます。反論があれば申して下さい。皆さんからの反論を反芻しようと思います。

「捨てるほど核持つ国が北叱る」

最後に、核兵器禁止の問題について話します。やっと核兵器禁止条約が、国連で発効することになりました。確かに、北朝鮮のやっていることは、言語道断でね、制裁を受けようが、締め付けられようが仕方ないと思います。しかし、わたしは「捨てるほど　核もつ国が　北叱る」と詠みました。いちばん説得力がないのは、核を持つ国です。日本政府は、アメリカの意向に逆らってでも、核兵器禁止条約に参加して当然じゃないかなと思います。

わたしは、反核平和マラソン（今年で36回目、岸和田城から大阪城まで約40キロ）を核兵器禁止のゼッケンをつけて走っています。マラソン―スポーツ―の世界というのは、まったくそういうことには疎いんです。参加者のなかに「そんなもんつけて、なんで走らないかんのや」という人がいるんですが、「それを決まりにしているんやから、ゼッケンをつけて走ろうや。岸和田市長も挨拶にきているし、たくさんの応援を得てやっているんやから、ぜひ自分たちのやっていることを世間に知らせて、それが今度の核兵器禁止条約になったのやないか」と説得しました。

マラソンが終わったあと、打ち上げやっていて、初めて参加した選手が帰りしなに、「ダン吉さん、今日走ったことで、核兵器がひとつなくなるんやないか」と言っていて、「そうやろ、あと１万５０００人参加してくれると、世界の核兵器がゼロになるよ。勇気をもって、言いたいことを言おう」と、わたしも酔っ払いながら答えました。

そんなわけで、それぞれが勇気を持って声を出せば、世論に影響すると信じて、やっていきましょう。

《司会：寺内徹乗》鶴彬の精神で、現実の矛盾を詠んでいく。マスコミを批判するのではなく、川柳を通して、世論を変えていくというお話でした。核の問題も出てきました。次は平野さんお願いします。

反戦の思い、恐れず表現しよう

《平野喜之》先ほどから、反戦川柳人という表現が鶴彬にふさわしいのか、ふさわしくないのかという点で、意見が分かれていますが、ぼくには鶴彬の生き方をみて、非暴力的に平和を希求した川柳人であり、反戦川柳人と呼ぶのは堅いイメージを受けています。

平和という概念も、戦争のない状態だけが平和ではなくて、日本国憲法の前文にもありますように、専制、圧迫、偏狭、欠乏のない状態が平和だと思います。そういう意味で、鶴彬は戦争に反対と言っただけの反戦川柳人ではなくて、いわゆる構造的暴力・専制と圧迫、偏狭、欠乏がない状態を平和として、それを求めた川柳人じゃないかなと考えています。

それで共謀罪の話が出ましたが、共謀罪は私たちがしっかり見守っていかないと、適用範囲が広がっていくので注意していかないといけないと思います。鶴彬から学ぶことは、深井一郎先生が言ったように、反戦の思いを恐れずに表現することにあります。共謀罪の狙いは、実際に適用されて監獄に入れられることはしばらくはないと思いますが、いままで反戦とか、反原発とかの運動をしてきた人たちが自ら萎縮するという効果が表れるのではないでしょうか。

そういうときに、人がおっかながって扱わない材料を扱っていた鶴彬をひとつの手本にして、われわれも萎縮しないように、自由な表現、批判、反戦の思いを恐れずに、表現しないといけないのではないでしょうか。

それからどんな立場で、社会の問題を考えていくのかについて、深井先生は「彼は腹で考え、心で叫んだ」とまとめました。ひとつは腹

の底から考えたということがあるんでしょうが、空腹になって、食えない身を抱えて、そこから発想していきました。食えない身になって哲学する、すなわち、いちばん苦しんでいる者の立場に立って発想して、表現することを鶴彬から学びました。

最後に、憲法前文の精神と通ずるものがあると思いますが、国家権力は暴力を孕んでいると思います。それにたいしてどう対抗していくのかという問題です。暴力にたいして、暴力で対抗するという方法ではなくて、川柳という武器で対抗していったのが鶴彬だと思います。鶴彬は川柳のことを「手榴弾の詩」という言葉を使ったりしています。勤労大衆の胸に飛び込んでいく「寸劇詩」とも言っています。川柳を風刺をもって批判していく武器だと考えていました。それが非常に大事なことだと思います。

もうひとつは鶴彬は川柳の大衆性を大事にしました。これはいわゆる通俗的な意味ではないと、口を酸っぱくして言っています。川柳は高く、正しい思想性と深刻複雑な社会性を持ったものであり、かつ大衆に愛され親しまれるために、何よりも分かりやすく、おもしろくなければならないと言っています。ボーンと現実のからくりをひとことで暴いていくことが川柳だと思います。

寺内さんが鶴彬をわかりやすくするために、『絵本　鶴彬の生涯』で表現しました。実はぼくの娘も寺内さんの息子さんも、同じ高松小学校の２年生です。娘は、ぼくが「君が代」が嫌いなことをよく知っていて、朝、ぼくがなかなか起きないので、娘が「君が代」を歌います。娘の「君が代」がぼくの目覚ましになっているのです。

小学校教育の問題がひとつあると思います。平和の教育への貢献というのがあって、盛岡の宇部功先生に、３年連続して高松小学校などに来ていただいたり、小学生でもわかる鶴彬の一生を寺内さんの絵本で知らせたりしています。とくに年齢が低ければ低いほど、教育に左右されやすいので、教育という問題に敏感になっていかないといけないと思います。

《司会：寺内徹乗》共謀罪の話も出てきました。パート１で神山監督は、戦争は首相ひとりでは始まらないということや、今右傾化する時代にあるとお話されました。また平野さんが、共謀罪の役割は反戦、反核、反原発などを訴えている人を萎縮させるという話もありました。これらのことが世の中を悪い方向にもっていく要因だと思います。鶴彬の精神で、今後未来とどう向きあっていったらよいか、神山監督の視点でお話していただきたいと思います。

鶴彬は愛の人、植民地朝鮮を詠む

《神山征二郎》なかなか難しい問題です。平野さんが最後に教育の問題についておっしゃいましたが、わたしは昭和16（１９４６）年生まれで、敗戦の時４歳なので、皇民化教育を受けていないんですよ。まだ学校に上がっていませんし、幼稚園もありませんでした。

わたしより３つほど上の人は小学校に入って、皇民化教育を受けています。そこで、「君たちは天皇陛下の子、赤子」と教えられるのですが、勉強ができる子ほど理解が速いんですね。先生の教えることを速く覚える子が秀才で、先生が間違っていることを教えるとは思っていませんから、秀才ほど入っていくんです。なかには、同じことを10回ほど繰り返さないと理解出来ない子もいるんで、「おれは父ちゃんと母ちゃんの子なのに」と戸惑うのですが、秀才はそうはなりません。

映画『ひめゆりの塔』で、沖縄那覇の第一女子師範と高等女学校の女生徒を撮っていますが、当時は、女性で高等科に行く人は非常に少なくて、家庭に恵まれていて、勉強もできる子が行っています。その映画を作ったときは、まだ70歳から80歳で、生存されていまして、直接取材をしました。彼女らは「本当に戦争が終わるまで、日本が負けるなど夢にも思いませんでした」と言っていました。

あそこまで追い込まれて、１日これくらいのおにぎりを１個か２個しか食べられないで、毎日傷ついた兵隊さんが送られてくる穴蔵で、

看護婦さんの代わりのようなことをさせられていました。そんな生活などしていたら生理なんか止まっちゃうんですよ。15歳から20歳くらいの女性です。

艦砲射撃だけではなくて、飛行機が来てバーッと爆弾を落としていくわけですよ。それでも、「これは敵をおびき寄せているんだ、世界でいちばん強い日本の軍隊―友軍―がすぐ反撃する」と思っていたそうです。最後に手を挙げて、助かった人達に話を聞いたのですが、みんな秀才なんですよ。だから頭がいいなんていうのは、いいような悪いようなもんですね。勉強ができるということは基準にはなりませんよ。鶴彬も小学校では一番の秀才でしたが、小学校で一番の秀才なんて、世の中にいくらでもいます。

教育が大事だと思います。森友学園なんていうのはね、マンガ以下ですよ。安倍の嫁さんがあそこへ行って名誉校長にしてもらって１００万円渡した。しかし最後までシラを切って、選挙やって、「北朝鮮が撃ってくるぞ、撃ってくるぞ」といって、自民党が勝つとすれば、

神山征二郎監督の映画「ひめゆりの塔」

そのおかげですよ。

どうしてあの政府が私たちを守れますか。空襲だといって警報（Ｊアラート）を鳴らして、防空頭巾をかぶせて、マンガ以下ですよ。政府のやっていることはその程度なんですよ。そこを見ていかないといけないと思います。

鶴彬という人はね、「愛の人」なんでしょうね。朝鮮のことを句に詠んでいます。あの当時の朝鮮は日本の植民地でした。１９１０年、明治の終わりに植民地統治を始め、36年ぐらい続きました。本当に酷かったのですよ。苗字を変えろというんです。李とか朴とかを神山とか田中に変えろというわけですよ。むちゃくちゃに近いんですよ。ヨーロッパのイギリスやフランスがアフリカで植民地政策をやってますけど、創氏改名までやっていません。日本人は頭が硬直していたんです。

日本人になるために、名前を変えろというんでしょう。それに教室では日本語教育でしょ。今でも80歳以上の人は日本語を話せます。私が映画監督で『三たびの海峡』という映画を作るときに、手助けしてくれた人ですが、わたしより10歳ほど上で、小学校のときに日本語教育を受けていますし、監督やっている方だから、そこそこ勉強もできるかなと思いますが、もう日本語などペラペラです。

植民地支配が始まるまでは朝鮮人や中国人を蔑視などしていないのです。逆に尊敬してきたんですよ。漢字文化が中国から入って来たように、私たちの文化は漢字ですから、差別できるわけないですよ。

ところが、朝鮮を植民地にして、一時世界中を日本にしようとしていたんですよ。中国とか、東南アジアを支配して、オーストラリアまで行ったんですから。将校には半端な能力ではなれませんからね。東大入るよりも難しかったのです。

鶴彬は平和のために闘う詩人と言いますけども、あの差別の時代に、朝鮮にとても同情していますね。今と違って、昔ですから、そこがやっぱりすばらしいものをもっていると思います。

《総合司会：遠田勝良》今日は１時半から４時まで、神山征二郎監督、佐藤岳俊さん、岩佐ダン吉さん、平野喜之さんの４人のパネリストと司会の寺内徹乗さんのもとで、大変勉強になる話を聞きました。本当にありがとうございます。みなさん、もう一度大きな拍手をお願いします。では、閉会の挨拶を当会幹事の板坂さんにお願いします。

戦争の危機、鶴彬の精神生かそう

《鶴彬を顕彰する会幹事：板坂洋介》

板坂洋介さん

鶴彬を顕彰する会の幹事をしている板坂と言います。わたしは金沢生まれの金沢育ちですが、幹事として月に１回は高松での会合に参加させていただいています。今日は岩手から、東京から、大阪からそして地元からと４人のパネラーに出席いただき、本当にありがとうございました。

また、今日は約90人の方々にご参加をいただいています。先ほど話があったように、８年前の映画『鶴彬　こころの軌跡』が完成する直前の10月に、この教育会館の３階ホールで、シンポジュウムを開催いたしました。その時のパネラーは今日も出席していただいた神山監督さんが中心に座りました。そして脇には深井一郎先生（県内で鶴彬を広めた貢献者）が坐り、もう一人、岡田一杜さん（本名は山川健二という方ですが、昨年92歳でお亡くなりになりました）です。

岡田一杜という柳名はどうしてつけたのかと聞いたところ、実はお袋の名前を柳名にしていると、話していました。なかなかの力のある方でした。一叩人もたびたび岡田さんを訪問しています。岡田さんに言わせれば一叩人が勝手に資料を持って行ったということですが、その後、その資料は石川近代文学館に全部そろっております。

もう一人のパネラーは千葉龍さんという、「北陸中日新聞」の編集委員で、詩人、作家として活躍していました。また当時の石川県川柳協会会長・酒井路也さんもパネラーとして出ていただきました。８年間で、５人のパネラーのうち深井先生、岡田さん、千葉さんの３人を亡くしてしまいました。神山監督だけが２度ここに登場されたわけです。

さて、来年は鶴彬没後80年です。再来年は生誕１１０年の節目です。この１、２年後の日本の政治はどうなるのか、鶴彬は地底から今日のシンポジウムをどう聞いてくれたのか、顕彰会の歩みを「ようお前らがんばっとるな」と言ってくれたかなーと思いつつ、「お前らこれでいいのか、満足してはダメだぞ」とも言っているような気がします。

明日は投票日ですが、今、日本の立憲主義が危ない、憲法が破壊される、平和主義が危ないという状況にあります。２度と戦争してはいけないと誓ったわれわれや先輩達の思いは打ち消され、戦争する国になろうとしています。

これにたいして、われわれはささやかであろうと、手をつなげば大きな力になることは間違いないんです。鶴彬はそのことを信じ、29歳で命を断たれました。明日の投票の結果がどうなろうと、野党が再編成されるなかで、市民が政党を動かし、世の中を変えていくことを、鶴彬は念じていると思います。

私たちひとりひとりが鶴彬になった気持ちで、日本の政治、日本の有様を人間らしい社会にしていきたいと思っています。われわれにはもう先がありませんが、今日登場しました平野さんや寺内さんは50代40代で、多くの方々の支えがあって、次の世代の顕彰会を引き継いでいくでしょう。

来年は、地元演劇集団によって、鶴彬を芝居にする準備が進んでおります。今、若い青年層の劇団がシナリオを書き準備をしております。金沢芸術村のドラマ工房で、何幕かの作品を考えています。来年にはご案内をしたいと思います。

再来年生誕１１０年目の節目に何をやろうか、みなさまからの声を

参考にしながら、顕彰会としての役割を果たしたいと思っております。皆さんからの支えあっての顕彰会でございます。最後に先ほどマスコミ批判が出ましたが、今日は朝日新聞と北陸中日新聞の記者が来ております。以上をもちまして、本日のシンポジウムを終わらせていただきます。ありがとうございました。

《総合司会：遠田勝良》ありがとうございました。なかなか力強い閉会の挨拶でした。最初にご案内しましたが、尹奉吉のシンポジウムを企画されている田村光彰さんを紹介します。

尹奉吉・金沢シンポジュウムを紹介

田村光彰さん

《元北陸大学教授・田村光彰》こういうすばらしい会があって、私たちの活動を紹介させていただくことに、本当に感謝しております。わたしも70代の先のない世代でありますが、12月２日（土）、３日（日）に金沢大学のサテライトプラザにある教室で「尹奉吉と世界平和」というテーマで、シンポジウムを予定しています。尹奉吉は、日本の植民地支配にたいしてたたかった独立運動家です。金沢の野田山にお墓があります。

３点について聞いてください。ひとつは内容です。それは最初の日は尹奉吉とはどういう人なのかということについて、２日目は尹奉吉に学んで世界平和、東アジアの平和をどう作っていくか、すなわち運動場面についてテーマにします。

例えば、１９３０年代の反戦平和というテーマで、立命館大学の勝村誠先生が話して下さいます。そのときに、顕彰会の平野喜之さんにコメントをいただくことの同意を得ています。さらに、東アジアの平和運動と韓国の民主化というテーマで獄中19年の徐勝（ソスン）さん―顔じゅう火傷で、拷問に耐え抜いた方です―が話してくださいます。

私たちは鶴彬の思想を韓国に伝えたいと考えています。こういう思想を日本だけではなく、海外にも種をまかないといけないと思っております。もうひとつ、高松へ韓国の人たちを連れて行って、フィールドワークをおこないます。顕彰する会の板坂さんがフィールドワークの案内をしてくださいます。

２番目の内容というのは、尹奉吉と鶴彬の共通点ですね、ふたりとも治安維持法体制下で活動した人です。実は、日本では治安維持法による死刑判決は１件も出ていないんです。日本では、誰も死刑判決を受けていません。では何処で死刑判決が出ているのか、それは植民地なんですね。植民地朝鮮での独立運動、すなわち抵抗運動にたいして治安維持法が適用され、多数の死刑判決が出され、処刑されました。最終的には数はわかりませんが、起訴率も朝鮮が日本よりも圧倒的に高いんですね。この治安維持法とのたたかい、尹奉吉のたたかいを、治安維持法を通してみていきます。

３番目は上からの抑圧と下からの諦め・服従・迎合とのふたつがあって始めて、弾圧体制が成り立っていきます。この上からの抑圧にたいして、諦めずにたたかっていく、この点が鶴彬と尹奉吉のふたりに共通していることであって、私たちはこの点を日本に広めていきたい。12月の２日、３日には多くの皆さんの参加をお待ちしています。（田村光彰氏は尹奉吉義士共の会会長、いしかわ教育総研所長、金沢在住）

鶴彬と尹奉吉、衛戍監獄で一緒

《朴賢沢》ちなみに、鶴彬先生と尹奉吉は大阪衛戍監獄に１カ月間一緒に入っていました。鶴彬先生は朝鮮人について７つの句を詠んでいます。そのなかに「ヨボと辱められて　怒りこみあげる　朝鮮語となる」という句があります。「ヨボ」というのは「お前」「あなた」と

いう意味なんです。電話では「ヨボセヨ」といいますが、これは「あなたですか」という意味です。

それを日本人が朝鮮人にたいして、「よぼよぼ」の「ヨボ」と差別的に呼ぶようにしたんです。衛戍監獄のなかで、尹奉吉が看守から「ヨボ」とバカにされて怒りがこみ上げてきて、日本語でしゃべれないものだから、朝鮮語で言い返した、そういう様子を鶴彬が見ていたのではないかと想像しています。今度のシンポジウムには、ぜひ参加していただきたいと思います。（朴賢沢氏は尹奉吉義士暗葬地保存会会長、金沢在住）

《総合司会：遠田勝良》大阪の衛戍監獄で鶴彬と尹奉吉が同じ空気を吸っていたと思いますが、話す機会があったかどうかまではわかりません。

もう終わりになりますが、皆さんのところに感想文を書いていただく用紙が入っていますので、ぜひ書いてください。もうひとつ、会員募集の用紙も入っていると思います。まだ、会員になっていない方はぜひ入会してください。よろしくお願いします。今日はありがとうございました。

（文責・須磨　明）

二〇一七年十一月二十二日　北陸中日新聞の記事から

鶴彬　句に込めた願いは

金沢でシンポ　反戦、表現の自由議論

反戦の川柳作家鶴彬（つるあきら）の功績を振り返るシンポジウム「今、鶴彬から学ぶこと」（北陸中日新聞後援）が二十一日、金沢市香林坊の県教育会館であった。市民約八十人が参加し、非戦への思いを新たにした。

市民団体「鶴彬を顕彰する会」が主催。パネリストとして、映画「鶴彬～こころの軌跡」の神山征二郎（こうやま）監督と、盛岡市で句碑を建立した川柳作家の佐藤岳俊さん、大阪市で句碑を建立した川柳作家岩佐ダン吉さん、地元かほく市高松で句碑がある浄専寺の平野喜之氏が登場した。

鶴彬は戦前、治安維持法で摘発され、二十九歳の若さで獄死した。パネリストたちは、鶴彬の反戦川柳を掲載した雑誌「川柳人」が発行を中断させられたことなどを説明。共謀罪などにも言及し、表現の自由が失われる恐ろしさを語った。

神山監督は「弾一発にも国費が使われている。戦争には底なしの利権がある」と危機感を示し、平野住職も「平和とは、戦争だけでなくどんな圧迫も欠乏もない状態。鶴彬はただの反戦ではなく、非暴力的に平和を希求した。私たちも自由のために恐れず表現していくべきだ」と強調した。

（堀井聡子）

二〇一七年十一月二十七日　朝日新聞の記事から

平和を希求　鶴彬の姿勢継承

金沢でシンポ　90人参加

昭和初期に反戦の句を詠んだ川柳作家の鶴彬（１９０９～38）の生き方を通して現代社会を考えるシンポジウム「今、鶴彬から学ぶこと」（鶴彬を顕彰する会主催）が21日、金沢市香林坊１丁目の県教育会館で開かれた。同会幹事の寺内徹乗さんが司会を務め、約90人の参加者が熱心に耳を傾けた。

鶴のドキュメンタリー映画を手がけた映画監督神山征二郎（こうやま）さんは「早く父を病気で亡くし、母は再婚で上京するために養子に出された。母を詠んだ句もあり、きっと会いたかったのだろう」とし、「そうした思いが他者への愛や、優しさを持つ人格を形成したのではないか」と述べた。

鶴が編集に関わったことがある雑誌「川柳人」を主宰する川柳作家の佐藤岳俊さん（岩手県）は「当時、『川柳人』は弾圧されたが、鶴は『人間の本質を捉え、現実社会の矛盾を作品に刻む』というポリシーを最後まで持ち続けた。その姿勢を受け継いでいくことが鶴を生かすこと」。大阪城公園にある鶴の句碑の建立に尽力した岩佐ダン吉さん（大阪府）は「国の最大の悪事は戦争をすること。鶴はそれに立ち向かった立派な川柳人」と評し、浄専寺（かほく市）住職の平野喜之さんは「『共謀罪』が適用されたが、平和を希求した鶴の姿を手本に、自由への表現や批判をしていくことが大切」と話した。

参加した金沢市の主婦安田圭子さん（74）は「鶴彬は平和を求めるまっすぐな情熱を持ち、ロマンチストな人だと思う。こうした企画を続けてほしい」と話していた。

（須藤佳代子）

シンポジウムのアンケートより

神山征二郎監督の話で、特に印象に残った点は？

戦後、50年で悪い時代になった。（70代男性）

鶴さんは朝鮮のことを書いた。「愛の人」だったと思う。（60代男性）

戦争は、利権。このことは、多くの人に言っていかなければならないと思います。（70代男性）

映画は見ました。あんな苦労があったとはビックリでした。（80代女性）

映画製作のウラ話なども聞かせて下さり感謝。自分から持ち出しすることがあっても、大事な問題は取り扱うべき。（80代男性）

映画作りの裏話も混えて、楽しく聞きました。（50代女性）

戦争は最大の利権。（60代男性）

映画を引き受けるまでの秘話。（70代男性）

鶴彬映画製作の裏話。（60代男性）

今、戦争に関しての映画がつくられなくなった。（50代男性）

鶴彬の植民地支配。鶴彬はその差別を見る目があった。（50代男性）

佐藤岳俊さんの話で、特に印象に残った点は？

「死ぬまで自分のポリシーを持つ者が詩人」に同感。一回笑って終わりの「サラリーマン川柳」（70代男性）

「川柳人」を継続して発行されている。（60代男性）

「鶴彬は自分のポリシーを最後まで貫いた詩人である」（60代男性）

お墓の場所をめぐる捜索。なぜ石川県に鶴彬のお墓がないのか。考えさせられる話で印象に残りました。（70代男性）

大変な努力をされたのですね。学びました（80代女性）

鶴彬への気持ちがよくわかった。（50代女性）

詩人とは死ぬまで自分のポリシーを持っている人。（50代女性）

小学生でも読める字で句碑を立てる。（60代男性）

墓発見について。（70代男性）

死後、自分の墓は自分の意にならぬ。（60代男性）

核の傘は破れる。（70代男性）

岩佐ダン吉さんの話で、特に印象に残った点は？

安倍的なものが攻撃してくる時代だ。（70代男性）

選者が変わり、投句者が変わり、世の中が変わっていく。（70代男性）

積極的に出て行き発信することが、私たちに問われている。世論を変えていこう。それぞれが言いたいことを言っていこう。（60代男性）

「捨てるほど核持つ国が北叱る」―まず、保有国が核を廃棄しないと説得力がありません。（70代男性）

市との交渉。川柳についても理解できた。（50代女性）

大阪城は句碑ではなく「顕彰碑」（60代男性）

大阪城公園に顕彰碑ができるまで。（70代男性）

「あかつき川柳会」の活動。（60代男性）

大阪市の交渉が大変だったこと。今、大阪市は人権博物館に予算をつ

けないだけでなく、土地代の請求裁判を起こしているとか。（50代男性）

平野喜之さんの話で、特に印象に残った点は？

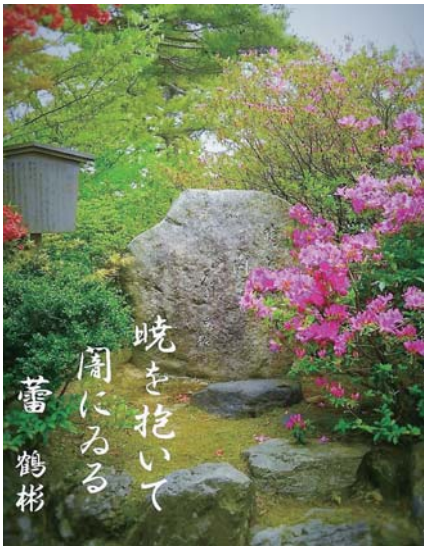
鶴に暴力的なものを感じない。委縮せず恐れず平和の句を作った。（70代男性）
「反戦川柳人」より「非暴力的平和を希求した川柳人」を提示したと捉えたい。（60代男性）
「勤労大衆への寸劇詩としての川柳」として捉えることが重要。（60代男性）
鶴彬の受容を４つに分けてのご説明。分かりやすく学ばせて頂きました。（70代男性）
石川県のお話。初めてでした。（80代女性）
深井先生の言葉。「なるほど！」でした。鶴彬が知られていく歴史がよく分かりました。（50代女性）
頭でなく腹で考えた。（60代男性）
鶴彬の生き方を広めることは、国策の犠牲者を出さないこと。（70代男性）

その他、意見・感想

「はばたき」の告知で今回のシンポを知りました。立派なチラシが作られているのですね。（70代男性）
よい企画だったと思います。（60代男性）
会場に若い人が少なかったのが残念。（70代男性）
参加者の声があれば、もっと良かったです。（50代男性）
すべて、心に残りました。有難うございました。パネラーの方達と意見交換できる時間があれば、良かったと思います。（60代女性）
全体に有意義でした。（70代男性）
大変良かったです。川柳を通して、平和、しあわせの追求を皆で考える会にされますよう祈っています。（80代男性）

盛岡の句碑（1982）

高松歴史公園の句碑（1972）



金沢卯辰山の句碑（1965）

生家の句碑（2009年）

■発　行　鶴彬を顕彰する会
■事務局　〒929-1215
石川県かほく市高松キ５
（小山　広助 気付）
■TEL・FAX　076－281－1201
■E-mail：turuakira@yahoo.co.jp

大阪城公園の句碑（2008年）

浄専寺の句碑（2009年）